

## 世界概念の二義性と人間精神の二律背反

渋谷 久

### (1)

世界とは何であるか。これは哲学の発生以来、今日に至るまで連綿と問い続けられている問いである。この問いに対する答えは、具体的には世界観とか世界像という形態をとっている。この形態はあまりにも多種多様であるので、その総てを論じ尽すことは、ここでは不可能である。それ故にわれわれは問題を限定しなければならない。小論の目的は、カントの世界概念の二義性を考察し、それとの関連においていわゆる二律背反の問題を論ずることにある。

ところで、世界概念を問題にする場合、必然的に問題になるのは時間と空間である。<sup>(1)</sup> われわれは、世界と言え、すでに空間的な或る広がりを用意している。それ故にわれわれは先ず空間について論じなければならないであろう。

それでは、一体カントは空間をどのように考えていたのであろうか。カント自身の哲学の歴史を繙けば明らかであるが、彼の空間論の内容には多少の変遷が見られる。このことは時間論に関しても同様である。われわれが先ず初めに注目すべきものは、1768年の論文「空間における方位の区別の第一根拠について」<sup>(2)</sup> である。これは、いわゆる前批判期 (vorkritische Periode) の最後の論文とされているものである。この論文では絶対的空間の現実性の根拠が問題にされている。カントによれば、例えば右手と左手は完全に「類似的かつ等しい」(ähnlich und gleich) が、同一の限界内に含まれ得ない。右手と左手は互いに他の不一致対称物 (inkongruentes Gegenstück) である。<sup>(3)</sup> 両手の相違は直観的には自明であるが、概念的に明らかにすることはできない。空間における方位の区別は直観と深いかわりを有する。

空間は、カントにあっては、ライプニッツの考

えるがごとき事物間の秩序・関係ではない。空間はわれわれの感性的直観を可能にする場であり、それは相対的なものではなく絶対的・根源的なものである。前批判期におけるカントの空間は、ニュートンの主張するがごとき、それ自身で存在する絶対的空間である。それは一方では物質の合成の可能性の第1根拠として実在性を有し、<sup>(4)</sup> 他方ではすべての外的感覚を初めて可能ならしむる一つの根本概念 (ein Grundbegriff) である。<sup>(5)</sup> 方位の区別も絶対的空間に対する関係において初めて可能になる。ところで、一般に有限なるものは他との相互関係において規定されるものであり、その存在の根拠を他者のうちに有する。しかるに、無限なるものはそれ自身において規定され、自己の存在の根拠を自己自身のうちに有する。絶対的空間は根源的なものであり、それ自身無限である。前批判期のカントの考えに従えば、世界や世界の事物はこの無限なる絶対的空間に存在することになる。しかし、このことは、世界がこの無限なる空間を完全に充たしているということを直ちに意味するものではない。世界が無限なる空間を充たしているか否かは、空間の無限性とは別の問題である。

絶対的空間はもちろん直観の対象ではない。しかし、『純粋理性批判』の「先験的感性論」におけるがごとき純粹直観ないし直観の形式としての空間は1768年の論文にはいまだ現れていない。前批判期の末期に至ってもカントはなお絶対的空間の実在性に固執していると解される。この時期のカントにあっては空間は直観の形式であるよりも、むしろ『純粋理性批判』で展開される悟性概念に近い性格を有する。もとより空間の実在性は問題である。

(2)

空間は実在的なものであるのか、それとも観念的なものであるのか。このことが初めて幾分明らかになるのは、1770年の論文（教授就任論文）「可感界および可想界の形式と原理とについて」<sup>(6)</sup>においてである。哲学史の通説によれば、この論文はカント哲学の前批判期と批判期とを劃する位置にある。したがってこの論文はカント哲学の成立と変遷という点からして極めて重要な意味をもつものである。本論文では二世界説がとられている。二世界（可感界と可想界）に対応して二種の認識が考えられる。二種の認識とは感性的認識と悟性的認識である。可感界の先天的認識の典型として数学が挙げられ、可想界の先天的認識として形而上学が挙げられる。形而上学は専ら思惟の純粹形式に基づく学であり、物自体の必然的・普遍的認識である。しかして、カントにあっては可感界と可想界は並列的に論じられ、両者の結びつきは甚だ困難にみえる。この点では彼はまさにプラトンの的である。

さて、教授就任論文では時間と空間は可感界の二大原理とされており、これら二大原理に関するカントの考えは、『純粹理性批判』の「先験的感性論」にみられる見解と概ね一致している。1768年の論文にみられるがごとき実在性を有する絶対的空間は、教授就任論文では否定されている。

「空間は客観的なもの、実在的なものではなく、また実体でも偶有性でも関係でもない、そうではなくて、主観的なもの、観念的なものであり、そして精神の本性から確乎たる法則によって生じ、一切の全く外的に感覺されたものを相互に同位秩序におくところのいわば図式である。」<sup>(7)</sup> 時間についてもこれとほぼ同じことが述べられている。すなわち「時間は客観的なもの、実在的なものではない、実体でも偶有性でも関係でもなくて、人間精神の本性によって必然的な、あらゆる可感的なものを一定の法則によって同位的に関係づける主観的条件であり、そして純粹直観である。」<sup>(8)</sup> 今や可感界の形式の原理は時間・空間である。それは主観の直観形式であり、また純粹直観でもある。

それでは、可想界の形式の原理とは何であろうか。カントによれば、「……可想界の形式の原理

に関する問いの核心は、多数の実体が相互作用の関係にあり、そしてこのようにして、世界と言われる同一の全体に属するのは、一体いかにして可能であろうか、が明らかになる点に存する。」<sup>(9)</sup> ここでは世界はその質料に関してではなくして形式（形相）に関して問題にされる。一体いかにして多数のものの間に連結が存するのであるか、また、いかにして万物の間に全体性が存するのであるか。これが大きな問題である。カントによれば、実体の相互作用を実体の存在だけで十分に認識できると考えるのは、物理的影響説の誤謬である。実体の相互作用の問題は因果性の問題である。因果性の問題は、後に現れる『純粹理性批判』の「先験的分析論」で論じられるものであり、それは悟性概念すなわち範疇の問題である。因果性の問題は純粹に認識論の問題であり、新カント学派のコーヘンのカント解釈からすれば自然科学の問題である。だが、教授就任論文では因果性の問題は自然科学的であるよりも、むしろ形而上学的である。カントにとっては形而上学は誠に心を悩ます学であった。完全に否定することもできず、さればと言って全面的に肯定することもできないというのが、伝統的形而上学に対する、当時のカントの哲学的態度であった。彼の胸中には多分に動揺がみられる。例えば「形而上学の夢によって解明されたる視靈者の夢」（1766年）で、彼は形而上学に対して一方では肯定的態度をとり、他方では否定的態度をとっている。それ故に、後世、この形而上学否定の態度を強調するのは、批判主義の起源を遡って1766年のこの論文に求めようとするのである。ところが、教授就任論文でカントは可想界の認識つまり形而上学を否定するどころか、積極的に肯定している。そこでは因果性の問題は専ら形而上学の問題である。カントによれば、相互作用は必然的な実体には全く帰属し得ない。「……実体の全体は、偶然的な全体であって、世界はその本質上純粹な偶然的なものから成る。」<sup>(10)</sup> 更に、このような実体の原因となる必然的な実体は、それ自身原因としてののみ、結果としての世界に結合するのであり、したがって世界の原因は世界の外に存在する。世界の實體はことごとく一者に依存する。結局、「……宇宙の實體



の結合における統一は、万物の、一者への依存関係の帰結である。」<sup>(4)</sup>

さて、カントは可感界と可想界とを区別したが、両者にはどのような違いがあるのでしょうか。また、両者にはどのような共通点があるのでしょうか。教授就任論文におけるカントの考えによれば、実体的合成体においては、分析が部分つまり単純なものに至って終るように、総合は全体つまり世界に至って完結する。しかし、『純粋理性批判』ではこのように端的に一義的な考え方は示されていない。ところで、全体や合成体は一体感性の対象なのであるだろうか、それとも悟性の対象なのであるだろうか。或いはそれは感性ならびに悟性の対象なのであるだろうか。教授就任論文では *sensualitas* の対象と *intellectus* の対象との峻別が問題である。<sup>(5)</sup> 全体とか合成体も、このような対象の峻別という観点から論じられている。カントによれば、例えば、与えられた部分から全体の合成を抽象的概念によつて思惟することと、合成の概念を判明な直観によつて具体的に表象することとは異なる。前者は悟性に関係し、後者は感性に関係する。概念と表象に関連してカントは「不可能」と「表象不可能」とを区別する。不可能とは悟性の法則に合致しないということである。論理的に矛盾するものは不可能であるが、或る概念が感性的認識の法則に従わないということで、それを不可能とするわけにはいかない。論理的に不可能なものはもちろん表象不可能である。しかるに、論理的に無矛盾なものであっても、それが総て表象可能であるというわけではない。論理的に可能なものでも表象不可能なものが存在する。

教授就任論文では、『純粋理性批判』にみられる先験的構成主義はそれほど明瞭には認められず、論理は先験的主観の構成によるのではなく、むしろそれは初めから対象に含まれているとされる。論理を内含する対象を表象し得るか否かは、一にかかって先験的主観にある。ところが、感性的能力と悟性的能力との不一致の故に、主観が悟性の抽象的概念を直観において具体的に表象し得ないことがしばしばある。更にまた、感性的能力と悟性的能力との対立が対象そのものの矛盾を装い、それがために人間精神の限界が事物の本質そ

のものの限界と看なされることがある。主観の限界と事物の本質の限界とは区別されなければならない。主観の認識能力に限界があることは、すでにカントの認めるところである。それならば、事物の本質の限界とは何をさすのであろうか。筆者は先に日本哲学会研究機関誌『哲学』24号に小論「カントにおける存在論の可能性」を発表したが、そこで事物の本質が形式（形相）にあることを指摘した。存在する事物は少なくとも論理的に無矛盾である。事物の本質は形式にあるという場合、形式はまさに論理をさすものと解すべきである。しかし、論理的に無矛盾であるものが総て存在するというわけではない。事物がある仕方存在するには、そのように存在するに十分な理由がなければならない。事物の存在を保証するものは矛盾律と充足理由律である。これら両者はライプニッツの哲学における二大原理である。カントの教授就任論文にはライプニッツの影響が顕著に認められる。

ところで、『純粋理性批判』では先ず感性が論じられ、次に悟性が論じられている。感性から悟性へ——これは認識の過程にみられる一般的な順序である。われわれ人間にあっては単なる感性に終る認識もなければ、悟性のみによる認識もない——これが批判期におけるカントの哲学的確信であった。数学は純粋直観によつて成り立つと、しばしば言われているが、数学といえども純粋直観のみによつて成り立つものではない。数学は悟性の洗礼をも受けなければならない。数学が純粋直観によつて成り立つと言われるのは、数学的認識に時間・空間という契機が必要であるということを示すにすぎない。数学は直観による概念の構成において成り立つ。いずれにせよ、われわれ人間にあっては学的認識は感性と悟性とを必要とする。ところが、教授就任論文によると、われわれの認識は必ずしも感性と悟性という二つの認識能力を必要としない。そこでは感性の段階に終る認識や悟性のみによる認識が論じられている。悟性による認識とは形而上学ないし形而上学的認識をさすものである。かくて、教授就任論文は、やがて批判の対象となる悪しき形而上学に対してなお肯定的な立場をとっている。思うに、後に現れる『純粋理性批判』では、悟性概念である範疇は、

現象界に適用される場合にのみ意味があり、経験を超えた対象である物自体へ適用される場合には無意味であるとされている。範疇の前者のごとき適用は内在的(immanent)であり、後者のそれは超驗的(transzendent)である。『純粹理性批判』では範疇の正しい使用は前者に限られている。

### (3)

教授就任論文の立場からすれば、悟性はしばしば超驗的であろうとする。それでは、世界の認識に関して感性とこのような悟性との間に何ら抗争・矛盾は存在しないのであろうか。この疑問に答えるために、われわれは窃取的公理(axioma subrepticium)について論じなければならない。カントは悟性の使用を二つに分けた。その一つは論理的使用であり、他は実在的使用である。前者は純粹自然科学・数学に關与し、後者は形而上学に關与する。論理的使用は、矛盾律に従って概念相互の比較を可能にする。ところが、実在的使用によって事物の概念または関係の概念が与えられる。いずれにせよ、悟性と概念とは不可分の関係にあるが、カントは感性的なものを悟性的概念に必然的に付随するものとして推称する公理を窃取的公理と名づける。この公理は、悟性的認識を装った感性的認識の一切の欺瞞から生ずるのである。カントによれば、このような欺瞞は次のごとく一般的定式で表される。<sup>(4)</sup>

- 1 そのもとでのみ対象の直観が可能なる同一の感性的条件が、対象の可能性そのものの条件である。
- 2 そのもとでのみ、対象の悟性的概念を形成するために、所与が相互に比較され得る同一の感性的条件が、やはり、対象の可能性そのものの条件である。
- 3 そのもとでのみ、遭遇するある対象の、与えられた悟性的概念のもとへの包摂が可能なる同一の感性的条件が、やはり、対象そのものの可能性の条件である。

第1の欺瞞に関する窃取的公理とは、存在する総てのものはどこか或る場所に、そしていつか或る時にある、ということである。ところが、「……物

体的世界における非物質的なものの現在には潜在的であって場所的でない(たとい、非本来的にはそう呼ばれはしても)、だが、空間は物質に対してのみ可能的な相互的作用の諸条件を含む。<sup>(4)</sup> 時間・空間の諸制約が妥当するのは、物質的実体に関してのみである。したがって、非物質的実体の、物的世界における場所を問うことは空虚な試みである。第2の窃取的公理は、一つは量の認識に、他は質の認識にかかわるものである。「前者は、一切の現実的多は数によって与えられ得、それゆえ一切の量は有限である、というものであり、後者は、不可能なものはすべて自己矛盾する、というものである。<sup>(4)</sup> 感性の法則と悟性の法則とはおのずから異なるものであり、したがって量・合成体・部分などに関しても感性の立場に立つ論証と悟性の立場に立つ論証とは互いに異なる面をもつ。第3の窃取的公理は存在の偶然性と必然性との関係するものである。ここで問題になるのは感性的所与と悟性的概念との関係である。

それでは、悟性的認識を装った感性的認識に欺かれないようにするには、どうしたらよいであろうか。それには、われわれは先ず認識における感性的制約つまり時間・空間を存在するがままの対象の可能性の制約たらしめないことである。時間・空間は感性的直観の主観的制約にすぎない。今や空間はニュートンの提唱するがごとく絶対的空間でもなければ、ライプニッツの言うがごとく事物間の秩序・関係でもない。時間・空間の本性はその観念性にある。時間・空間の観念性という新たな考えが強調されるのは『純粹理性批判』においてである。この著作では二律背反は大きな問題であるが、これの解決にも時間・空間の観念性が大きな意義をもつのである。

ところで、今述べた三つの窃取的公理の内容は、不完全な形においてではあるが、『純粹理性批判』における二律背反論の萌芽を含むものである。第1の窃取的公理は第1二律背反に対応し、第2の窃取的公理は、第1・第2二律背反に概ね相当する。つまり、第1・第2の窃取的公理は数学的二律背反に相当する。第3の窃取的公理は力学的二律背反に相当する。この公理では存在の偶然性・必然性が問題にされている。それ故に第3の窃取的公理は、力学的二律背反に相当するとい



っても、概ね第4二律背反に対応する。

教授就任論文でカントは可感界と可想界とを認めた。思うに可想界は『純粹理性批判』でも論じられているが、これはいわゆる理論理性の対象ではない。つまり可想界は認識の対象ではない。感性的直観の対象ならざる事物の総合的認識は理論理性にとっては不可能である。可想界は形而上学の世界概念である。それは世界理念という一つの先驗的理念である。先驗的理念に関してカントは、「私は総ての先驗的理念を、それが諸現象の総合における絶対的総体性に関係するかぎり、世界概念と名づける」<sup>100</sup>と言う。現象の系列の絶対的総体性を要求する世界概念は経験の対象に決してなり得ない。「世界一般の理念はしたがって総ての可能的系列における諸現象の全体の表象である。」<sup>101</sup>ところで、現象における被制約者の系列の総体はそれ自身無制約的なものである。批判期のカントが示すように、このような無制約者はわれわれに被制約者と共に与えられているのではなくして、課せられているのである。いわゆる宇宙論的理念は認識に関しては構成的原理としてではなく規制的原理としてのみ意味をもつのである。この点は教授就任論文では不明瞭である。

ところで、今述べた世界理念は単に理論理性の規制的原理であるのみならず、やがては実践理性にも関与するものである。可想界とは、もともと自由を本質とする道德的世界のことである。

#### (4)

世界概念に関する最も大きな問題の一つは二律背反の問題である。そもそも二律背反の問題はカントの批判哲学の出発点をなすものである。このことは彼がクリスティアーン・ガルヴェに宛てた書簡<sup>102</sup>（1798年9月21日）によっても明らかである。『純粹理性批判』の「先驗的弁証論」では四つの二律背反が挙げられている。それらは「先驗的分析論」で論じられている範疇すなわち量・質・関係・様相の四つに対応するものである。

二律背反の問題は、現象における被制約者から端的なる無制約者への推論において発生する「合理的宇宙論」的なものである。それは具体的には次のようになる。

- (1) 世界は時間ならびに空間に関して有限であるか、それとも無限であるか。
- (2) 合成実体には単純要素があるか、否か。
- (3) 自然的因果性のほかに、自由による因果性があるか、否か。
- (4) 世界の根拠として必然的存在者が存在するか、否か。

二律背反は批判哲学の出発点であると同時に、また批判哲学の重要な問題の一つでもある。そのなかでも特に第1二律背反はわれわれにとって最大の関心事である。それでは、一体、世界は有限なのであろうか、それとも無限なのであろうか。

第1二律背反によると世界は次のように考えられる。

定立＝世界は時間において始まりをもち、空間に関しても限界によって囲まれている。<sup>103</sup>

反定立＝世界は始まりをもたず、また空間における限界をもたず、却って時間に関しても空間に関しても無限である。<sup>104</sup>

定立・反定立についてカントはかなり詳細な証明を試みている。彼の証明法は間接的な証明法である。すなわち、それは、定立の正当性を証明するのに反定立を誤りとし、反定立の正当性を証明するのに定立を誤りとするものである。われわれは、今、空間的広がりという点から世界の有限性ないし無限性を問題にするのであるから、先ず定立における世界の空間的限界に関するカント自身の証明を要約することにしよう。

#### 定立の証明の要約

世界が空間的に限界をもたないと仮定せよ。そうすれば、世界は同時に現存する事物の無限なる与えられた全体であるだろう。ところで、直観の限界内に与えられない量の大きさは、その部分の総合によってのみ思惟される。したがってあらゆる空間を充たす無限なる世界を全体として思惟するためには、その部分の継起的総合が完結したものと看なされなければならない。だが、部分の総合は決して完結し得ない。それ故に現実的な事物の無限なる集合は同時に与えられたものとは看なされ得ず、したがって世界は空間的に限界を有する。<sup>105</sup>

定立の証明は一見したところ理路整然としているが、果してそうであろうか。そこには誤謬が含まれていないであろうか。この点を明らかにするには、われわれは更に反定立の証明を考察し、両証明を比較・検討しなければならない。現在、われわれの関心事は世界の空間的大きさであるから、定立の場合と同様に世界の空間的大きさに関する証明の部分のみを次に示すことにする。

#### 反定立の証明の要約

世界が空間に関して限界をもつと仮定せよ。そうすれば、世界は限界づけられていない空虚な空間のうちにあることになる。したがって事物の集合としての世界と空間との間に或る関係が成り立つ。しかし、世界はその外に直観の対象の存しない絶対的全体であり、空虚な空間に対する世界の関係は対象に対する世界の関係ではないであろう。それ故に空虚な空間によって世界を限界づけることは無意味である。したがって世界は空間的には限界づけられておらず、無限である。<sup>24</sup>

さて、定立も反定立ももとよりカント自身の主張ではない。それらはカント以前の哲学者の主張である。それらに対してカントは証明を試みたのであるが、彼の証明には定立ないし反定立の主張者の考えと彼自身の考えが混淆している。それがために証明は或る意味では煩雑なものになっている。また、カントにとって悲しいことであるが、後世の哲学者の或るものはこの証明に対して必ずしも好意的ではない。彼らの指摘するところによれば、カントの証明は証明の形を装っているが、実際には証明になっていないのである。例えば、ヘーゲルは、カントのなした証明に対して、証明さるべきものが直接的に証明の中に前提されていると非難する。<sup>25</sup> つまりカントの証明は循環論証であるとヘーゲルは言うのである。

しかし、後に明らかになるように、カントによれば定立も反定立も共に誤りである。したがって、論理の飛躍や過誤なしに、このような命題を正当なりと証明することはそもそも無理なことである。更にまた、証明を困難ならしめているのは「世界」という概念である。カントは無制約者の理念として霊魂・世界・神を挙げたが、世界は他の二者とは違い、特異な理念である。カントは世

界という理念について次のように言う。「私がこの理念を宇宙論的と呼ぶわけは、この理念がその客観を常に感性界においてのみとり、その対象が感官の客観であるところの概念以外のものは何も用いず、したがってその限りにおいて内在的であって超驗的ではなく、それ故にそのところまではまだ理念ではないからである。」<sup>26</sup> つまり宇宙論的理念はもともと単に現象としての世界について言えることなのであり、それがやがて現象における制約者の系列の総体としての世界を表すものになる。宇宙論的理念は一方では経験的であり、他方では超驗的である。世界という宇宙論的理念は相容れない二つの性格を同時に有する。それ故に、推論において「世界」が媒概念として用いられる場合、しばしば媒概念多義の虚偽が生ずる。以上のような理由からして、定立・反定立いずれの場合にせよ、その証明を試みる時、慎重を期さなければならない。

さて、カントは、哲学史上、定立の立場を独断論と看なし、反定立の立場を経験論と看なす。前者の代表的哲学者はプラトンで、後者のそれはエピクロスである。定立と反定立との抗争は、プラトン主義とエピクロス主義との対立に始まる。<sup>27</sup> 定立の立場に立つものは世界の可想的始源を求め、世界と世界における一切の事物は根源的存在者に負うと主張する。しかるに、反定立の立場に立つものは世界の時間的な絶対的始源と空間的な絶対的限界とを拒絶するものである。だが、両者の抗争は実は独断論と経験論との抗争ではなく、二種の独断論のそれである。

定立も反定立も共に独断的なりとするならば、具体的にはいかなる点が独断的なのであろうか。われわれはこのことについて更に検討しなければならない。定立と反定立との抗争について論ずる場合、留意すべきいくつかの事柄があるが、そのなかでも特に重要なのは、無限なる空虚な空間に対する世界の関係・真空の实在性・絶対的空間に対する世界の空間的關係などであろう。定立とその証明で有限であるとされているのは空間における世界であって、空間そのものではない。問題の解決には空間と世間との区別が重要である。或る一定の容積をもつ器にその容積と同量の物質を充たすとき、器の容積の大小を論ずることは、直ち



に物質の量の多少を論ずることにつながる。しかし、器に物質が充満していないとき、そうはいかない。世界と空間についても事態は同じである。世界が空間を隈なく充たしているなら、空間の有限性ないし無限性を明らかにすれば、世界の有限性ないし無限性はおのずと明らかになるであろう。

定立の主張するところによると、世界は空間において限界をもたなければならない。したがって定立は世界の限界を超えた空虚な空間の实在性を必然的に要求する。世界はこの空虚な空間に対して一定の関係を有する。定立では真空の实在性は揺がしがたいものである。定立の証明でカントは、有限なる世界が無限なる絶対的空間において絶対的位置を有するというニュートンの主張に与する。ところが、反定立の立場からすれば、無限なる絶対的空間とその中に存在する世界との区別は必ずしも明確になされ得ない。世界が世界の外に存する空虚な空間によって限界づけられるということはあり得ないのである。反定立の立場はまさにライプニッツの形而上学的立場に一致する。彼によると、事物なき空間は単に観念的な可能性にすぎない。空間の無限性の主張は、空間に存在する事物の集合つまり世界の無限性の主張につながる。しかし、だからと言って、彼は空間とその中に存在する事物の集合（世界）が同一であると主張するのではない。ライプニッツが言わんとするところは、物質的世界と空間とが同じものであるということではなく、物質的世界のないところに空間はないということである。彼にあっては更に空間はそれ自身絶対的な実在ではなく、共存する事物の間に存する秩序・関係である。このことからすれば、世界は今や空間的な限界をもち得ない。世界が空間のうちにあるのではなくして、むしろ空間が世界のうちにあるのである。反定立にあっては世界の無限性を問題にすることは、世界の大きさのみか空間そのものの大きさをも問題にすることである。結局、反定立の立場に立てば、世界の限界を超えた空虚な空間は無意味であり、不合理である。

カントにとっては、定立・反定立の主張は独断的哲学者の解決しがたき形而上学的論争の一例である。それは単に合理論と経験論との対立という

ごときものではない。一般に自然ならびに世界に対しては二つの立場が考えられる。一つは数学的・純粹自然科学的立場であり、他は形而上学的立場である。前者の典型はニュートンであり、後者の典型はライプニッツ、ヴォルフなどである。それでは、彼らは一体いかなる世界について論じているのであろうか。もし彼らの有する世界概念に共通の基盤がなければ、われわれが、世界の有限性ないし無限性についての彼らの見解を比較・検討しても、それはあまり意味のないことである。

世界は現象の総体 (Totalität der Erscheinungen) と看なされるが、カントにあっては一般に二つの総体が考えられる。Sadik J. Al-Azm はこれらを分析的総体 (analytic totality) ならびに総合的総体 (synthetic totality) と称している。彼によれば、「前者の場合には、われわれは全体の直観から、与えられた全体そのものによって制約される部分の分析へ進行する。空間と時間は感性論ならびに教授就任論文では分析的総体と看なされる。……他方、物質的世界は定立では総合的総体と考えられる。というのは、この場合われわれは「全体から部分の一定の多様へ進行することは」<sup>(a)</sup>できず、われわれは「部分の継起的総合によって全体の可能性を立証しなければならない」<sup>(b)</sup>からである。」<sup>(c)</sup> また、「空間は無限なる与えられた大きさとして表象される。」<sup>(d)</sup> 空間は一つの無限量であり、われわれが表象する個々の空間は、無限なる空間の部分として、無限なる空間に含まれている。ところが、総合的総体は分析的総体とは事情を異にし、それは部分の継起的な総合によってのみ成り立つ。

さて、分析的総体は無限量として表象されるが、総合的総体の場合は一体どうなのであろうか。Sadik J. Al-Azm のように部分の継起的総合によって成り立つ総体を総合的総体とするならば、第1二律背反で問題になっている総体は、定立の場合のみならず更に反定立の場合も、総合的総体であると解される。ただ総合的総体でも、それに関連して無制約者をいかに考えるかという点に違いはある。

定立の場合には、無制約者は系列の一部であり、しかもそれに系列の他のすべての項が従属し、それ自身は他のいかなる制約のもとにもない

ものである。<sup>98</sup> この無制約者は系列の第1項と考えられ、したがって系列は完結的なものになる。このように考えるならば、結局、世界は空間的に限界をもつことになる。ところが、反定立で問題になる無制約者は系列の第1項ではない。すなわち、この無制約者は単に全系列において存立するものと考えられ、この系列においては総ての項はそれぞれ例外なく制約されており、総ての項がただ全体として無制約的なのである。<sup>99</sup> この場合、われわれはいかに背進 (Regressus) を重ねても無制約的な第1項に到達し得ず、系列は決して完成し得ない。背進は無限である。したがって世界は空間的に無限であるということになる。以上のことからすれば、世界の有限性ないし無限性は、無制約者をどのように理解するかにかかっている。

先にも触れたように、世界という理念は究極的には文字通り宇宙論的理念であるが、もともと現象界にかかわるものである。われわれが単に世界と言う場合、それは理念と現象という二面を有する。理念は理性の対象であり、現象は悟性の対象である。現象においては、世界は完結した全体として現れることはない。現象の系列においては、無制約者を求めてなされる背進は無限に継続する。したがって悟性の立場は反定立の立場である。これに反して、系列に絶対的に無制約的な第1項を認め、世界を完結した一つの全体として把握するのが理性の立場であり、これは、結局、定立の立場である。

このようにみてくるならば、定立の主張と反定立の主張は同じ立場に立ってなされたものではないと考えられる。異なる立場から相反する命題が導かれても、それらは相互に矛盾しているとは言えないであろう。しかも、世界の有限性・無限性と言っても、それは実は世界の表象における有限性・無限性にすぎない。カントにあっては、世界はその表象の仕方を離れて論ずることができないものである。同じ事態をいくつかの仕方で表現し得ることは確かに認められる。われわれはその一例を考えてみよう。

$$(a) \quad 1 + 1 = 2$$

$$(b) \quad 1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{2^3} + \cdots + \frac{1}{2^n} = 2$$

$$(n \rightarrow \infty)$$

これらの数式の左辺は、(a)の場合は有限個の数で表現されているが、(b)の場合は事情が異なる。(b)の場合の左辺は無限級数であり、経験の立場においては、その数列はいかようにしても完結し得ない。悟性の立場に立つならば、この数列はまさに無限である。ところが、このような無限級数をも、まとまりのある完結の全体として把握するのが、理性の立場である。ここでは、結局、結果的には同じ数である2を有限個の数で表現することもできるし、無限個の数の総和と考えることもできるということが明らかになった。

それでは、われわれが今までに論じてきた二律背反の問題は、要約すれば、何なのであろうか。このことに関してG. マルティーンは適切にも次のように言っている。「もし我々が問題の全体を今日の科学理論的認識から正しく概観しているとすれば、問題となるのは二律背反の二つの根源的領域の問題であり、これら二つともカントの二律背反論の根底にある問題である。一つの根源は、同一の事態が異なった方法によって——事情によってはたがいに矛盾するような方法によっても説明され得るという点にあり、他の根源は全体性の概念のなかにある。」<sup>100</sup> G. マルティーンの言う二つの問題のうちでも特に第1の問題がわれわれにとっては重要である。或る対象がいくつかの方法で表象されうるとすれば、表象における有限性・無限性は必ずしも直接に対象そのものの有限性・無限性に結びつくものではない。カントは対象の有限性・無限性についての証明を意図しながら、結局、対象の表象における有限性・無限性を論ずる結果に終わった。彼の試みた証明は空しいものに終わったというほかはない。

以上のことを総合するならば、第1二律背反における定立ならびに反定立の主張は、外観は二律背反の体をなしているが、真の二律背反とは言えないであろう。結局、世界はわれわれの表象を離れてそれ自身で存在するものではないから、このような世界をそれ自身で存在すると考え、それが有限ないし無限であると断定することは無意味であり、したがって定立も反定立も共に誤りである——このようにカントは考えるのである。この考えこそ先験的観念論の核心をなすものである。



(5)

われわれは以上で二律背反について一応の検討を試みたが、まだほかに検討の途がないであろうか。これがわれわれに残された次の問題である。

第1二律背反の抗争は背進的系列における項の絶対的総体の把握の仕方の抗争である。そこでは被制約者から無制約者への推論が大きな問題である。しかして、定立の場合にせよ、反定立の場合にせよ、被制約者から無制約者への背進が現実を与えられているものと看なされる。つまり被制約者の概念に無制約者の概念が含まれているとされる。被制約者は経験において与えられる。しかるに、無制約者が与えられるのはわれわれの思惟においてのみである。それはわれわれの思惟から独立してそれ自身で存在するものではなく、理性によってわれわれに課せられているのである。思うに、現象の総括 (Inbegriff) としての世界もまさにこのような性格をもつものである。世界は現象の総括として、それ自身、無制約的なものであるが、いま仮にそれが所与つまり経験の対象であると考えてみよう。そうすれば、世界が有限であるか、それとも無限であるかという問いは、意味をもつであろう。この場合、世界は(1)有限であるか或いは(2)無限であるかのいずれかである。この場合には排中律が適用されるのである。つまり世界には第3の存在の仕方はあり得ない。したがって第1二律背反における世界がもし可能的経験の対象であるならば、定立と反定立のうち一方が必然的に誤りということになる。一つの主語(S)に相反する二つの述語 (P und non-P) が同時に結合しないのである。

一般に世界は、現象における個々の被制約者という点からすれば経験の対象であるが、現象における被制約者の絶対的総体すなわち無制約者という点からすればまさに宇宙論的理念である。宇宙論的理念としての世界は時間・空間的規定をもつ対象の概念を表すものではない。それはわれわれに与えられているのではなく、課せられているのである。このような世界について、その有限性ないし無限性を問題にすることは許されない。したがって第1二律背反の定立も反定立も共に誤りで

ある。

このようにみてくるとき、第1二律背反は果して真に二律背反と言えるのであろうか。W. レートはこの疑問の解決に一つの示唆を与える。彼によると、矛盾的对立 (kontradiktorischer Gegensatz) は

- (1) Die Welt ist unendlich.
- (2) Die Welt ist nicht unendlich.

という二つの命題の間に成立し、弁証論的対立 (dialektischer Gegensatz) は

- (1) Die Welt ist endlich.
- (2) Die Welt ist unendlich.

という二つの命題の間に成立するのであるが、もし定立と反定立との間に成立する弁証論的対立が矛盾的对立でないならば、二律背反は全然問題にならないのである。<sup>(31)</sup> 弁証論的対立における第1の命題と矛盾的对立における第2の命題とが同義であれば、弁証論的対立と矛盾的对立とは同じになる。<sup>(32)</sup> しかし、W. レートも指摘するごとく、これら二命題は同義ではない。したがって弁証論的対立は矛盾的对立ではなく、二律背反は全然問題にならないということになる。結局、第1二律背反は単に弁証論的であり、それは仮象の間に生ずる抗争にすぎない。第1二律背反の両命題は共に誤りであり、「世界は時間・空間的に規定されない」という命題が真なるものと認められる。

今や第1二律背反における抗争は見せかけの矛盾にすぎないことが明らかになった。このことに関連して、カントは形而上学の進歩に関する懸賞論文で次のように述べている。「これら理性の諸命題の抗争は単に論理的に分析的対立 (矛盾対当) ※ の関係にあるのではない、すなわち単なる矛盾ではない。なぜならば、もしそうだとすれば、それらのうちの一つが真なるとき、他の命題は偽でなければならず、また、その逆でもなければならぬであろうからである。」<sup>(33)</sup> カントの考えによれば、一般に数学的二律背反の抗争は反対対当の関係にあり、力学的二律背反の抗争は小反対対当の関係にある。したがって第1二律背反の抗争は反対対当の関係にある。<sup>(34)</sup>

形式論理学の規則からすれば、反対対当にあつては、(1)二命題のうちいずれか一方が真なるときは、他方は必ず偽、(2)二命題のうちいずれか一方

が偽なるときは、他方の真偽は不定、ということになる。ところが、小反対対当にあっては、(1)二命題のうちいずれか一方が真なるときは、他方の真偽は不定、(2)二命題のうちいずれか一方が偽なるときは、他方は必ず真、ということになる。われわれがここで問題にするのは反対対当の場合であるが、これは定言的判断における全称肯定判断と全称否定判断との関係を表すものである。今述べたことから明らかなごとく、反対対当の場合には「両判断が共に真なること」があり得ず、しかも「両判断が共に偽なること」があり得る。反対対当にあっては第3の判断すなわち特称的判断が許容され得る。第1二律背反は反対対当の関係にあるというカントの考えを敷衍するならば、結局、「第1二律背反の両命題が共に真なること」があり得ないことになる。第1二律背反は見せかけの二律背反であって、真の二律背反ではない。

#### (6)

見せかけの抗争とはいえ、何故に二律背反という抗争が生ずるのであろうか。思うに、その理由は、実は世界をば感性的直観の対象と看なす前提から議論が出発した点にある。一般に、推論に誤りがなく、結論に誤りがあれば、前提が否定されなければならない。カント自身も第1二律背反における前提の虚偽を認めている。今や世界が時間・空間的に規定される対象でないことは明らかである。世界は一つの宇宙論的理念であり、われわれの認識の対象ではない。世界をば客観的对象として認識しようとする合理的宇宙論の試みは誤りである。一つの理念としての世界はわれわれに与えられたものではなくて、課せられたものである。課せられたものについては、有限性や無限性は原理的には主張され得ない。

結局、世界が時間・空間における対象と誤解されるとき、二律背反が生ずるのである。したがって世界が宇宙論的理念であることが明らかになれば、二律背反はおのずと解決する。世界については範疇的規定すなわち悟性的規定は不可能であるから、二律背反における抗争は矛盾的対立ではない。それは弁証論的対立である。そもそもカントにあっては弁証論は仮象の論理であり、二律背反

における抗争も結果的には仮象をめぐる抗争にすぎない。したがって世界なる宇宙論的理念に関する抗争は、われわれが定立・反定立のいずれの側に与しても、判然とした勝敗をもって終結するものではない。このような抗争は、その対象が仮象にすぎないと証明されることによってのみ終熄し得る。

ところで、ヘーゲルによれば、カントにあっては世界はそれ自身において自己矛盾するものではなく、意識こそがまさに自己矛盾的な存在である。世界から矛盾を遠ざけ、矛盾を精神の中へ移し、そこで矛盾を未解決のままにしておくことは、世界に対する余りにも大きな情愛である。<sup>(35)</sup>ヘーゲルのこのような批評は確かに或る意味では正鵠を失してはいない。しかし、これに対して異議を唱えるものもある。例えば W. レートもそのひとりであるが、彼によれば、カントとヘーゲルとの決定的な違いは理性概念の機能の理解にある。すなわち、ヘーゲルの場合とは異なり、カントにあっては理性概念は現実の構造の中に、それに対応するものをもっていないのである。<sup>(36)</sup>

確かにカントにあっては理性は感性的直観の対象に直接的に関与するものではない。理性が関与するのは悟性である。しかし、問題はこのような事実ではなくて、矛盾の所在をいかに考えるかにある。カントにあってはそれ自身において自己矛盾的な存在はあり得ない。したがって、世界をいかに解するにせよ、そこには矛盾は存在しない。それでは、矛盾は精神のうちに存在するのであろうか。カントにあっては、感性にせよ、悟性にせよ、或いは理性にせよ、これらはいずれもそれ自身のうちに矛盾を含むものではない。これら精神の諸能力にはそれぞれに妥当な固有の領域があり、精神の諸能力がそれぞれの領域を逸脱するところに誤謬が生ずるのである。悟性概念である範疇は経験の対象にのみ有効に適用されうる。しかるに、理性概念である理念は経験の対象を超えている。結局、カントにあっては第1二律背反は理性と悟性との抗争ではなく、理性と悟性との抗争である。

#### 註

(1) 本来ならば、時間と空間を並行させて論ずべきで



あるが、論文の枚数が限られているので、小論では主として空間的な側面から世界概念を論ずることにする。

- (2) 以下、本論文を1768年の論文と称する。
- (3) Vgl. I. Kant: Von dem ersten Grunde des Unterschiedes der Gegenden im Raume. I. Kants Werke, hrsg. v. Ernst Cassirer, Band II, S. 398. (以下、本著作集を K. W. という記号で表す。)
- (4) Vgl. Ibid., S. 394.
- (5) Vgl. Ibid., S. 399.
- (6) 以下、本論文を教授就任論文と称する。
- (7) 『カント全集』(理想社) 第3巻 243ページ(可感界と可想界との形式と原理)。◎ページ数の次にあるのは、引用文のある著作名である。以下、同様。◎原文でゲシュペルトの部分は、訳文では「・」で示されている。以下、同様。◎以下、本全集を K. R. という記号で表す。
- (8) K. R. 第3巻 238ページ(可感界と可想界との形式と原理)。
- (9) K. R. 第3巻 249ページ(可感界と可想界との形式と原理)。
- (10) K. R. 第3巻 250ページ(可感界と可想界との形式と原理)。
- (11) K. R. 第3巻 251ページ(可感界と可想界との形式と原理)。
- (12) 周知のごとく教授就任論文はラテン語で書かれている。カントの著作ではラテン語とドイツ語との対応関係が一つの大きな問題である。小論ではラテン語の和訳は『カント全集』(理想社)に従っている。

さて、*sensualitas* は *Sinnlichkeit* とほぼ同義に解されるから、これを「感性」と訳すことに異論はないであろう。問題は *intellectus* の場合である。*intellectus* は通常「知性」と訳されているが、『カント全集』(理想社)では「悟性」と訳されている。しかし、「悟性」が何をさすかについては考察が必要である。カントは *intellectus* を精神の上級能力と理解している。したがって問題の悟性は広義の悟性つまり上級の認識能力一般をさすとしなければならない。教授就任論文では狭義の悟性と狭義の理性との区別は明確になされていない。この区別が明瞭に現れるのは、『純粋理性批判』においてである。すなわち、この著作では「先験的分析論」における悟性と「先験的弁証論」における理性とは明確に区別されている。ところが、教授就任論文で

は、*intellectus* は或る場合には「先験的分析論」の悟性の機能を有し、また或る場合には「先験的弁証論」の理性の機能を有する。

- (13) 以下の1, 2, 3は共に K. R. 第3巻 259ページ(可感界と可想界との形式と原理)。
- (14) K. R. 第3巻 260ページ(可感界と可想界との形式と原理)。
- (15) K. R. 第3巻 262ページ(可感界と可想界との形式と原理)。
- (16) I. Kant: Kritik der reinen Vernunft, B 434.
- (17) Klaus Düsing: Die Teleologie in Kants Weltbegriff. Kantstudien, Ergänzungshefte 96, S. 25.
- (18) この書簡には次のように書かれている。「私の出発点は、神の現存在・不死などの研究ではなくして、純粋理性の二律背反、すなわち『世界は始まりをもつ——それは始まりをもたないなどから、人間には自由がある——これに対して、自由は存在せず、彼においては一切が自然必然性であるという第4二律背反に至るもの』であった。この二律背反は、私を初めて独断的な微睡から覚醒させ、理性そのものの批判へ駆りたてたものであり、かくして一見理性が自己自身と矛盾する観を呈するという不面目を除去することができたのである。」(K. W., Band X, S. 352.)

なお、この書簡で第4二律背反とされているものは『純粋理性批判』ではむしろ第3二律背反である。

- (19) I. Kant: Kritik der reinen Vernunft, B. 454.
- (20) Ibid., B. 455.
- (21) Vgl. Ibid., B. 454, B. 456.
- (22) Vgl. Ibid., B. 455, B. 457.
- (23) Vgl. G. W. F. Hegel: Wissenschaft der Logik. Erster Teil. Die Philosophische Bibliothek, Band 56, S. 231—236.
- なお、問題の循環論証について、わが国では岩崎武雄氏がその著『カント「純粋理性批判」の研究』の第5章で詳細に論じておられる。
- (24) I. Kant: Prolegomena, § 50.
- (25) Vgl. I. Kant: Kritik der reinen Vernunft, B. 493—504.
- (26) Sadik J. Al-Azm: The Origins of Kant's Arguments in the Antinomies. Oxford University Press. p. 11. (a), (b)の部分の原註→ Observation on the thesis.
- (27) I. Kant: Kritik der reinen Vernunft, B. 39.
- (28) Vgl. Ibid., B. 445.

- (29) Vgl. Ibid., B 445.
- (30) Gottfried Martin: Immanuel Kant, Ontologie und Wissenschaftstheorie. (門脇卓爾訳, 岩波書店, 71ページ)
- (31) Vgl. Wolfgang Röd: Dialektische Philosophie der Neuzeit 1. Beck'sche Schwarze Reihe, Band 120, S. 72.
- (32) Vgl. Ibid., S. 72.
- (33) I. Kant: Über die Fortschritte der Metaphysik seit Leibniz und Wolff. K. W., Band VIII, S. 274. ※ 原典ではラテン語。
- (34) Vgl. Ibid., S. 274.
- (35) Vgl. G. W. F. Hegel: Wissenschaft der Logik. Erster Teil. Die Philosophische Bibliothek, Band 56, S. 236.
- (36) Vgl. Wolfgang Röd: Dialektische Philosophie der Neuzeit 1. Beck'sche Schwarze Reihe, Band 120, S. 75.